

木剣起源の一試論

——七面大明神との関係について——

玉木 晃 仁

【はじめに】

日蓮宗修法は日蓮聖人の思想 それを礎とした教学史とは一線を期す存在である。しかし日蓮宗の布教において修法は大きな位置を占める。その必須アイテムが木剣であり、日蓮宗大荒行堂・遠寿院の加行けきやうにより相伝される秘密の奥義である。

木剣起源を『日蓮宗事典』（以下『事典』）加持杖の項によれば、「加持のとき病人や魅女（よりまし）を打つ棒。桃の木（またはざくろ）を一尺あまりに切り、悪霊鬼魅、病魔等を退散させるために願主の適所、患部等を打つ。桃の木を使用するのは、邪気を避け、悪鬼を払う仙木とされているため。『摩訶止観』巻第八の上に、「また、身上に痛むことあるところにしたがって、杖をもって痛く病処を打つこと四たび五たび十たびにいたる。（略）諸の病は心の作にあらざることなし。心に憂愁の思慮あらば邪氣入ることを得。いま痛をもってこれに迫れば、すなわち横想に暇あらず、邪氣去り病除かるるなり」とあり、加持杖使用の典拠とされている。本宗の修法も、当初はこの加持杖をもって行ったが、後に剣形の木剣となり、更に現今のような板木剣に変化してきた。加持杖を改めて剣形としたのは、日蓮聖人のいわゆる「元品の無明を切る大利剣」の切断の義をとって形を剣に擬したと考えられる。このことについて

て『祈祷故事略旨』は、天台大師は「事杖」をもってこれを「打ち」、聖人は「理剣」をもってこれを「切る」のだと説明している。』（『事典』九〇一頁C D）

『事典』の木剣起源の見解は、明治九年（一八七六）鶏浜日舜『祈祷故事略旨』の見解※1の踏襲のようである。それに疑問を持ったのが本稿の端緒である。

木剣起源の故事・縁起・相伝書において共通していることは修行僧が、七面山に登詣、七面大明神を感得、木剣を授与されることを端緒とし、身延積善房流修法により編み出され、日蓮宗修法の他門流に伝播、展開していった。※2

七面大明神は、日蓮宗の依経 妙法蓮華経 日蓮聖人遺文に確認できない。七面信仰は室町時代後期、身延門流の一部の信仰であった。江戸時代初期、日蓮教団を二分する不受不施派論争を契機に、徳川家側の受派の七面信仰が日蓮宗全体に伝播した側面がある。さらに江戸時代 大奥の信仰を得、江戸の庶民文化に根付き展開した日蓮宗独自の信仰形態である。本稿は木剣と七面大明神との関係を考察した一試論であり、加持杖が木剣起源に対する疑問が端緒である。

【持ち物を通してみる七面大明神の正体】

残存する最古の七面大明神の尊像は、身延山文庫所蔵の天正十三年（一五四四）刻銘 銅像七面大明神座像のようである。※3 その持ち物に注視すると、右手に鑰、左手に宝珠である。七面大明神像の特徴であり、実はそれ以外の持ち物を持つ尊像は、管見では確認できない。七面大明神を感得した神祕譚は多様であり、持ち物について言及されないのに関わらず、持ち物が差違なく統一されていることに興味を持った。

江戸時代、七面信仰流行に伴い、多種多様な縁起が作成された。七面大明神の本地も多様であるが、弁才天を本地とする縁起は多い。※4 弁才天の持ち物に照準を合わせてみる。

『金光明最勝王經』卷第七「大弁才天女品第十五之一」によれば、「常以^二八臂^一自莊嚴 各持^三弓箭刀稍斧 長杵鐵輪並繩索」(『大正新修大藏經』第十六卷四三三七c)とあり、七面大明神の持ち物の輪と宝珠は確認できない。

『大毘盧遮那成仏神變加持經』(『大日經』第四「密印品第九」)に具体的に持ち物は確認できない。^{※5}天台密教にとって重要な註釈書 一行(六八三〜七二七)撰『大日經義釈』がある。『大日經』を天台学・『法華經』を利用し註釈した書で、円仁(七九四〜八六四)により將來した。円密一致の立場の天台宗の学者 円珍(八一四〜八九一)・安然(八四一〜九一五)にも尊重され、台密は『義釈』の密教ともいえる。

その『大日經義釈』密印品第九に「先^ニ仰^テ左手^ヲ當^テ臍^ニ如^下承^ニ把^ル琵琶^ヲ狀^ノ」(『續天台宗全書・密教一』四八二頁下)と弁才天が左手に琵琶を持つ根拠となり、胎藏界現図曼荼羅の左手に琵琶を持ち、右手にバチを持つ二臂弁才天・妙音弁才天と展開していった。『阿婆縛抄』『行林抄』の台密の修法書には二臂の妙音弁才天が本尊とされていた。妙音弁才天の持ち物は琵琶とバチで七面大明神との関係はないと思われる。

本稿にとって、注目すべき弁才天信仰は、宇賀神と習合し変遷・展開した宇賀弁才天^{※6}である。比叡山、その文化圏から神道界・修験道にも影響を与えた。その重要な役割を持つ經典が次の通りである。

A、仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠王陀羅尼經

B、仏説即身貧軫福德円満宇賀神將菩薩白蛇示現三目成就經

C、仏説宇賀神王福德円満陀羅尼經

D、仏説大宇賀神功德弁才天經

E、大弁才天女秘密陀羅尼經

A〜Cが弁財天三部經、それにD・Eを加えると五部經・五本經といわれる。これらの經典は日本撰述偽經と認定され、『大正新修大藏經』に収録されていない。本稿では山本ひろ子『異神 中世日本の秘教的世界』(一九九八年初

版)に、弁才天三部経が翻刻・収録されている資料を用いる。以後頁数は、特別な断りがない限り『異神 中世日本の秘教的世界』の頁数である。^{*7}

A 『仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼経』に、宇賀神王の持ち物について

有_リ八臂。左_ニ第一、鉞。第二、輪宝。第三、宝弓。第四、宝珠。右_ニ第一、劍。第二、棒。第三、鎗。第四、宝箭。(四七六頁)

太字にしている持ち物は、今日の一般的七面大明神の尊像の持ち物である左手の宝珠。右手の鎗である。七面大明神は自ら宇賀弁才天の垂迹で、変態(メタモルフォーゼ)したと主張しているかのようである。

【宇賀弁才天 太刀と箆の呪法と木剣との関係】

山本ひろ子氏は、『異神 中世日本の秘教的世界』第三章 宇賀神異貌の弁才天女 II 『弁才天修儀』の儀礼宇宙行法と口伝をめぐって) 宇賀弁才天の秘伝の儀礼について論究されている。

比叡山で宇賀弁才天の修法書の頂点の書は、謙忠^{*8}による『最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼修儀』である。『弁才天修儀』『大修儀』『如意宝珠王修儀』と略して称される。「太刀と箆の呪法」(三七〇〜一頁)によれば、

次廻_リ太刀_ニ方_一再拜_シ、廻_リ箆_ニ方_一三礼_ス。

南無宇賀神將諸仏菩薩須臾間頓得如意宝珠王南無五方宇賀八神王十二神將三億六万諸眷属

ここから宇賀弁才天法の独特というべき行法が展開される。「太刀二廻ル」とは、不動明王の刀印を結び、慈救咒を唱えながら、右に三転する太刀辟除の作法である。「箆二廻ル」は、やはり刀印で左に三転して結果し、以下の礼文を唱えるのである。『修儀私記』に記しているように、古くは本物の太刀や弓矢を用いて辟除・結果を行った。(中略)『如意宝珠王修儀』でその所作が知られよう。

一、廻太刀 切十方

執^テ本尊^ノ右^ノ方^ヲ太刀^一、立^ニ右膝^ヲ廻^レ右誦^ニ慈救^ノ咒^ヲ切^ニ十方^ヲ也。是則降^ニ伏^{スル}十方^ノ障礙^ヲ意也。
この作法は、(C)『福徳円満陀羅尼經』の「右^ノ手^ニ持^ニ利劍^一、為^レ降^ニ伏^{センガ}障礙^神」
の一文と関係しよう。

一、廻^ル箒^一 射^ル正^方ヲ

執^テ本尊^ノ左^ノ方^ヲ弓^箭ヲ、立^ニ右膝^ヲ廻^レ右誦^ニ愛染^王念^ノ名^ヲ之^一明^ヲ、自^リ東方^一次^ニ射^ル之^ヲ。正^ク非^ズ射^ル之^ヲ。
唱^フ愛染^王咒^一。

愛染明王の真言を唱えながら射ている（以下略）

山本氏の論考を、補足すれば箒^{やぶく}は、矢を入れ、右腰に付けて携帯する道具。平安時代は公家の儀仗用に使用された。愛染明王の咒も梵語は、「ウン シツ テ」と読み、一字心咒と称される。また『修儀私記』は、大永六年（一五二六）の法印儼運書写『弁才天修儀私記』（前掲山本氏註二四 四六五〜六頁参照）のことである。辟除結界は、諸魔を除き結界すること。

この太刀と箒^{やぶく}の呪法を、身延積善房流修法が吸収・参考したと推理した。理由は、

①不動・愛染の咒を唱えること。

日蓮聖人の曼荼羅は、法華經の虚空会が表現されている。依經である妙法蓮華經に登場しない不動明王・愛染明王が梵語で記されている。日蓮聖人の曼荼羅を模範に、先師が檀信徒に授与した曼荼羅には、不動・愛染の梵語が記されていることが多い。組み込みやすい呪法である。今日の日蓮宗修法の現場で不動・愛染の梵語を使用したお札・御守り・御妙符を使用している。日蓮宗修法の伝統ともいえる。

②太刀（刀劍）を使用し辟除結界をすること。

刀剣を用い、不動・愛染の咒を唱える。この儀礼が多種の所作と融合して、今日の木剣で九字を切ることに展開したと推理した。今日の日蓮宗修法では、勧請 読経の後 木剣を用いて加持をする際に辟除結界のような所作をする。③伝書には、弓箭を使用した供述が多数確認できる。特に大がかりな地祭（四十九院法）には必須アイテムとなる。また山本氏は『大修儀』について「この書を聖典として、叡山では宇賀神を本尊とする弁才天法が盛んに実践されていたわけだが、叡山文庫に収蔵されている類書をみると実に多彩な展開を遂げていることがわかる。たとえば、実際に行われた行法の記録をみると必ずしも『大修儀』の通りには執行されていないし、また大修儀以外にもさまざまな宇賀弁才天法があった。」（三五九頁）と述べている。

日蓮宗修法師の私にとって納得がいく。中山法華経寺の大荒行で相伝を受けたが、布教現場では臨機応変に対応が必要で、儀礼の変化は必然である。

身延積善房の宇賀弁才天の秘法受容は、謙忠『最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼修儀』の相伝または派出した台密の秘法の相伝を受けた僧侶からか それとも何らかの思想 例えば台密と関係の深い修験道、吉田神道を介してなのか。現時点では不明である。

身延積善房で七面大明神の本地は宇賀弁才天と認識し、宇賀弁才天の儀礼吸収する過程で木剣が編み出されたと思索してみた。

【結び】

当初、木剣の起源・展開は、日蓮宗修法が吉田神道の思想を吸収した過程で成立したと推理した。吉田神道は教義確立に宇賀弁才天の秘法を研究・吸収した経緯があること。特に吉田神道八代当主 吉田兼右（一五一六～一五九九）の存在である。巖島神社に招聘され、神事を整備した。『身延鑑』の七面大明神は、自ら巖島神社の弁才天が本

地と告白していることは偶然だろうか。また吉田兼右は、仏心院日珖（一五三二～一五九九）と交流があり、身延山への影響も考えられるが、比叡山の宇賀弁才天の影響は広範なため、吉田神道だけの影響とは言い切れない。思案が尽きない。

木剣の起源は、身延積善房で、七面大明神の持ち物から本地を宇賀弁才天と認識があった。宇賀弁才天の秘密儀礼の吸収過程で木剣の原形 刀を修法に用いられるようになり、木剣へと展開・発展したと思う。今日でも木剣のことを楊枝ということがある。それについても機会を見つけ発表したい。

* 1 加藤瑞光 宮川了篤編『日蓮宗祈祷聖典』（以下『祈祷聖典』）二五三～四頁

* 2 「甲州身延積善坊第十代日閑法師傳 附日傳」（享保十六年（一七三二）脱稿六牙院日潮著『本化別頭佛祖統記』）四五

六～七頁 忍辱鎧日栄（？～一七二二）著『修験故事便覧』『祈祷聖典』二二四～五頁 『仙応房加行相承次第』宮崎英修『日蓮宗の祈祷法』三二七頁 小山田日寿（一八七四～一九三九）編著『祈祷指南書』『楊枝の寸法等』に木剣の寸法、具体的な書き方が掲載されている。その最後に、「以上の木剣は必ず開眼して使用し決して疎略にすべからず、現今の験師諸氏が多く使用するは此内、五段總通の木剣にて今、大正五年より一九九十八年即ち享保五年庚子九月二十日遠壽院日久聖人が認められし傳書には身延、山籠之内伝授とあり、然らば、日久聖人已来一九九十八年間中山門流もこの楊枝のみを使用せし者歟。（下略）」『祈祷聖典』五三六頁

* 3 『身延山久遠寺資料調査報告書』（身延町教育委員会 平成十六年）図版七 一四九頁上

* 4 高橋俊隆『日蓮聖人の歩みと教え 第四部身延入山と七面信仰』第五章に七面大明神の縁起について成立年代に沿って概説されている。

* 5 「仰三昧手在於臍輪 智慧手 空風相持 向身運動 如奏音樂 是妙音天費拏印」（『大正新修大藏經』第十八卷 二一九c）

* 6 光宗（一二七六～一三五〇）により応長元年（一三一）から貞和四年（一三四八）までの叡山天台の行事・作法や口

伝法門などを集録した『溪嵐拾葉集』に宇賀弁才天の弁天法が確認できる。

*7 服部法照「日本撰述偽経と講式・祭文」『印度学仏教研究』第四十一卷第一号（平成四年十二月）に弁財天五部経について、平成四年（一九九二）時点の資料の状況・内容も含め紹介されている。山本ひろ子『異神 中世日本の秘教的世界』（一九九八年初版）に、弁才天三部経が翻刻・収録されている。山本氏によれば、「資料Ⅰ（弁才天三部経）（仮題）は、叡山文庫・生源寺蔵写本『宇賀経』と、円覚蔵刊本『弁才天三部経略疏』の採択した本を校合の上、翻刻した」（四七五頁）とある。

*8 『大修儀』の作者 謙忠について不明な点が多い人物である。『溪嵐拾葉集』「弁天部」に謙忠と宇賀弁才天との関係を確認できる。

本稿は平成七年 服部法照氏から頂いた抜刷・示唆が端緒である。草稿は出来ていたが、発表の機会を逸していた。紙面を借りて服部法照氏に御礼申し上げる。